

健康状態がそのまま声に表れるため、風邪などには細心の注意が必要である。普通の人には何でもないような軽い風邪でも仕事ができなくなるので「歌手は風邪をひきやすい」といったイメージがある。扁桃腺を手術によって切除すると、声の質が変わってしまうこともあるという。

歌を長い息でうまく歌うためには腹式呼吸が大切だが、これに熟達するとどうしても下腹が出がちになるらしい。少なくとも今まで出ていた腹がひっこむ、ということはないようである。一般に太めの人のほうが声がたっぷりしているようだがホセ・カレラスのような例もあり、一概には言えない。ソプラノやテノールが高い声を出す時には相当の緊張力が必要とされ、高血圧には良くないようである。

最後になってしまったが、指揮者はどうであろうか。見たところいたって健康な職種のようにはあるが、気をつけないとむちうちになるのだそうだ。最弱音の部分から突然バーンと最強音に移行するところなど、その合図を全身でのけぞってやる結果、首が車に追突されたのと同じガックン状態になる。それ以外には下手なオーケストラを指揮すると、腕が痛くなって肩が凝るといふ。必死になってモーションを大きくしないと反応がもの足りないのである。また細かいスコアを常に見ているため、目にかかる負担もかなりなものようだ。

第一線の演奏家であり続けるために、健康管理は決しておろそかにはできない。

## ウィーン留学事始め

ウィーン国立音楽大学の新学期は毎年十月一日に始まる。学年最後の授業日が六月三十日だから、夏休み

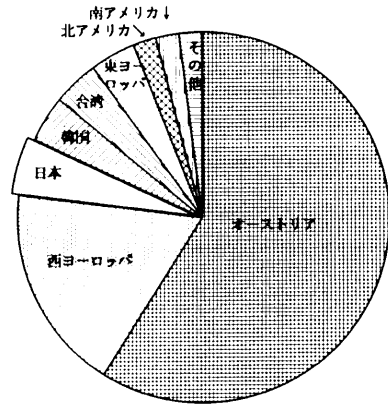
はまるまる三ヶ月も満喫でき  
る。もっとも器楽の演奏には  
常日頃からの鍛練が重要で、  
常識ある音楽学生ならば、こ  
の休み中でも練習はおこたれ  
ない。

ウィーン音大は世界でも有  
数の優れたレヴェルを誇る専  
門学校で、ここにはそれこそ  
世界中からの学生が集まり、  
凌ぎを削り合っている。一九  
八七年の統計ではオーストリ  
アを含めて五十三カ国および

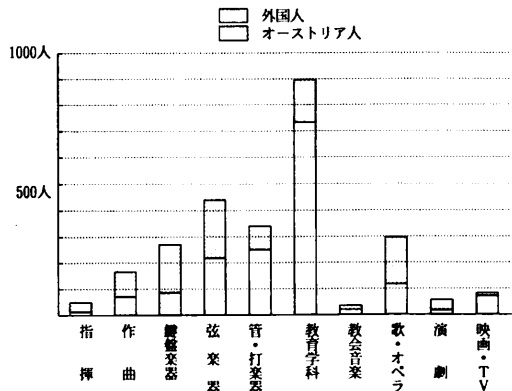
無国籍の学生が当校に正規の学生として登録しており、全校学生数は二千六百二十六人であった。  
外国人留学生の割合が高いのは作曲、指揮、鍵盤楽器、弦楽器、歌、演劇などの科で、管楽器、打楽器は  
それほどでもない。音楽教師としての資格の得られる教育科にオーストリア人が圧倒的に多いのはもちろ  
んだが、ここに籍を置く西ドイツからの学生も少なくない。この大学で勉強している外国人のうち、あたま  
数の一番多いのが西ドイツで約二百三十名、その次が日本、台湾、韓国でそれぞれ百名弱、そしてアメリカ  
合衆国（約三十名）、その後にはヨーロッパ各諸国からの留学生が席を連ねている。全学生のほぼ三分の一が  
外国人で、残りがオーストリア人学生である。

学生中で外国人の比率が一番高いのは何といってもピアノ専攻科である。オーストリア人四十名に対して

正規学生の出身国比率



専攻科別外国人学生分布率



外国人学生の数は約百名にものぼる。尚、面白い現象として、ピアノを勉強している学生の男女比は、外国人の場合一対三で圧倒的に女性が多いのに比べ、オーストリア人は二対一で男性が多い。

音楽家といっても霞を食べて生きられるわけはなく、いつかは自分の腕で稼ぎ、生活を成り立たせなくてはならない。オーケストラや劇場、合唱団などと契約できれば、程度の差はあるにせよ固定給がもらえ、生活のメドが立ちやすい。しかしピアノのようなソロ楽器の場合には、オーケストラ専属のピアニスト、あるいは歌劇場の専属伴奏者などになる以外、なかなか安定した生活が保障されにくい。教職に就けば別だが、教育科を選ばずピアノ専攻科に入るような学生達、皆一応は「ソリストになりたい」という夢を持っている。教えるのはやむを得ぬ場合の次善策と考えているのである。

最近の傾向として「元のとれないものはやらない」という若者が多いが、ピアノなどは苦勞に対して元のとれにくいものの中でも、その代表格だろう。学生時代はともかく、社会人になっても夢を追うのみでは少々心もとない。特に男性の場合はそうであろう。

男女同権が一般的になった今日この頃だが、器楽演奏の世界ではまだまだ男尊女卑の傾向が抜けきれていない。たとえば「ウィーンフィルに女性団員はお断り」という方針に、特に誰も表立っては異議を唱えず、「そうなんだろうな」と納得してしまうのも、そのひとつの現れだろう。

それはさておき、新学期の始まる直前には大学各科の入学試験が催される。入試申し込みは単に書類を提出するだけで、受験料のようなものは一切必要ない。(ウィーン市立の音楽学校コンセルヴァトリウムの場合には二百五十シリング必要との事である。)

ウィーン国立音大ピアノ科の例を見てみよう。ここには全世界からの学生が受験しに来る。その中にはすでにどこかの大学を卒業後、より一層腕に磨きをかけんとしてウィーンに馳せ参じるつわものも少なくない。

それらの受験生と、全国の人口を合わせても東京都の人口にさえ満たない小国オーストリアから育ちつつある若いピアノリストの芽とをまともに突き合わせるのでは、いくらオーストリアに音楽の伝統があるとはいえ、地元にとって不利である。事実、入試の結果を採点すると上位を占めるのは外国人ばかりとなり、純粹に成績順に可否を決定するとオーストリア人がどうしても洩れてしまう、という事態が数年続いたのである。

技術レベルを向上させるのに、ある程度の競争と淘汰とは必要不可欠であるが、オーストリア国民の血税によって運営されている大学でオーストリア人が勉強できない、という状況は決して好ましいものではない。それに対処するために数年前より、一番外国人によるプレッシャーの大きいピアノ科の入試に限り、まずオーストリア人の試験を行い、可能性のありそうなオーストリア国籍の人材を優先的に入学させてしまう事になった。残りの空席をその他全ての外国人に競争させた上、成績の良い順に入学を許可する、というシステムが現在行われているのである。

それに加え、今までは正規学生、聴講生、あるいは室内楽専攻、と入学後の学生のステータスによって多少採点の尺度を変更していた温情主義も廃止された。ピアノ科に籍を置きたい人間は、全員例外なく純正な実技の評価による入学試験に合格する事を最低の条件とする、というわけである。

これは一見フェアなように見えるが、弊害が全く無いわけでもない。たとえば各種の奨学生達。オーストリア国家の奨学金やフルブライトのように権威のあるものをもらえる事が内定している者、また共産圏諸国の場合など、出身国から特別に優遇されてウィーンに來た学生でも何らの特別措置の恩恵を受けることなく入試に臨み、純粹にその実力のみを評価される。その結果、国のエリートとしてメンツをかけて派遣されたような学生でさえ試験に通らず、この学生の祖国における可能性をつぶしてしまいかねない、という事態がしばしば生じるようになってしまった。

奨学金は正規学生としての登録が行われて初めて支払われる性質のものであり、試験に落ちて学生証がもらえない、となると、場合によっては受験した本人ばかりか、その国の大使館の文化担当官なども含めて面

目丸潰れ、といった事になりかねない。事実この新しい入試システムが導入された当初、そういった外交機関からのクレームが押し寄せた時期があった。

受験の条件は十六歳以上、という事のみで、それ以外は国籍、性別、学歴など要項に書き入れる欄こそあるものの、一切不問である。準備すべきはピアノ科の場合、バッハの作品、クラシックのソナタ、ショパン程度の練習曲、ロマン派の作品、今世紀に作曲された作品から各一曲ずつ計五曲を暗譜で、というもの。まづ簡単な楽典の常識テストが筆記であったのち、準備した曲から抜粋で一人ずつ十分間程度演奏する。入試は毎年九月。受験希望の人はそれまでにできる限りの準備を！

## 呼び屋

「マネージメント」「音楽事務所」というと、比較的安定したイメージである。一方、日本には「呼び屋」といわれる業務がある。これはその名の示す通り、外国よりアーティストを呼びコンサートを企画して儲けようとするもので、一般音楽事務所の経営上非常に重要かつ事務所のプレステージにも関わるものである。有名なアーティストを呼べればその事務所のイメージも上昇するが、ここで赤字を出してしまつては何にもならない。

日本の音楽マネージメントは国家などの公費による援助ゼロで営業している。したがって多大な経費をかけて準備を進めても、最後の土壇場になってから疾病などの不可抗力によるキャンセルが入ったりすると、事情によっては会社の存亡そのものを左右する程の赤字が出てしまう。

そのかわり思惑が一発当ると大儲けができる。以前ホロヴィッツの来日が初めて実現した折りなど招聘元